

早稲田上級教科書を使って

——特に文学作品を扱う——

絹 川 早 苗

I. はじめに

1986年から1988年にかけて早稲田上級教科書はワープロ打ちの試用教科書から今日の上級教科書へ推移、定着した。その間上級クラスを連続して担当し、特に1988年度は文学作品を多く受持ったので、それらを取り扱っての感触、学生の反応、問題点などをまとめてみたい。クラスの構成は次の通りである。

1986年度 (G4 クラス)

前期 5人 } (中国, 台湾, 韓国, イタリア, ドイツ, フランス, ブラ
後期 8人 }
ジル, タイ)

1987年度 (G4 クラス)

前期 13人+3人(短期中国専門家局) } (中国, 台湾, 韓国, アメリカ, イ
後期 11人 }
ギリス, ネパール, ブラジル, フィリピン, インドネシア)

1988年度 (G5 クラス)

前期 13人+4人(中国専門家局) } (中国, 韓国, マカオ, アメリカ, スイ
後期 8人 }
ス, オーストリア, ドイツ, ベトナム)

クラス構成の傾向としては、3年とも国による偏りがなく東西入りまじり、バラエティに富んでいた。中でも、1987年度は優秀な学生が揃い、ま

とまりもよく活気にみち、教師の方も刺激されること大であった。本国の大学院で日本文学を専攻する予定の、研究論文のテーマを模索に来ている英国の学生、当時スピーチコンテストで優勝し後にはそこで講演もしたというネパールの学生をはじめとして、語学力、知識度も高く、意欲的な学生が多かったためである。1986年度は、人数も少なかったこともあるが、文学作品を取り扱っても語学的な水準にとどまり盛り上りは少なかった。今年度の1988年は、それぞれ仕事や生活を持っていた者が多かったせいか全体におとなしく、マイペースの勉強ぶりでクラスとしての活気やまともには欠けるところがあった。文学を専攻する者はいなかったが(心理学、経済など)、日本の社会や文化への関心度は高くそれを理解するために文学は欠かせないと、全体として文学作品の志向は強かった。

中国から短期の専門家局の学生が2年にわたって入って来たが、前年度は最初多少の緊張がみられたものの、暫くすると彼等をクラスが巻き込む形となり互いに刺激を受けたようだ。今年度は中国からの学生がクラスにも何人かいたので、あまり違和感はなく特別目立つ現象は生じなかった。

これらのクラスに対し上級教材をどのように取り扱ったかを、次に簡単に述べてみることにしたい。

II. 教材の取り扱い方

G4, G5クラスは週5コマで、そのうち2コマを担当したが、4コマが教科書使用なのでどうしても読解が主となりがちである。そこでそれぞれが文法、聴解、表現(文字及び口頭)を授業内に取り込む工夫をしているが、私も次のような形で盛り込んだ。

上級教科書はかなり程度が高く、それぞれ予習をしてくることを前提としているが、それを確かめるために先ず学生達に読ませてみる。次に教師がまとまりのある段落を音読し、その間教科書を閉じ、耳だけでどこまで理解できるか各自確かめさせた。しかしこれは教科書の文字をしきりに追う者がいたりして、なかなか徹底はしない。その後、質問などして簡単に

まとめたり、答えさせたりする口頭表現に移る。新教科書になると朗読テープも完備したので早速使用してみたが、内容が難しい場合は速度が早く聴きとり難いものも少しあった。また文学作品は内容を生かした朗読がほしいなどとも感じた。

大体のところを理解させてから読解に入るのだが、その際、練習や学習の手引きとして文例や参考資料を手渡した。文例は、授業中に口頭で作らせたり宿題として課したりするもの、参考資料は、文学上の用語や固有名詞、作品の背景、作者の簡単な紹介など、理解や鑑賞上必要と考えられる事項をまとめたものである。その点、新教科書は[注]や[言語事項]が整備されているので、学習の助けになり、教師の負担も軽減されたが、やはりそれを補う形のをそれぞれ作成した。

三年間で取り扱った文学作品(小説、随筆)は次の通りであるが、それぞれについて簡単な感想を逐次述べていくことにする。

上級 I

4. 坊ちゃん
7. 摘み草(随筆)
9. 富岳百景
14. 伊豆の踊子
15. 梗概を書く(随筆)
20. 虫のいろいろ
24. 細雪

上級 II

1. 吾輩は猫である
5. 城の崎にて
11. 休憩時間

なお、今年度及び前年度(後期のみ)の学生からアンケートを取ってみた。この種のものは、学生の好みや性格によってかなりの違いが出て面的であるが、比較する資料の一端ともなればと思い最後に付記した。

III. 取り扱った文学作品について

1. 坊ちゃん (1987, 1988 年)

文章は歯切れがよく、内容自体それほど難しくないのが、文学志向のな

い学生も面白いようである。1988年(これより後⑧とする)の方が好評だったのは、抜萃部が試用版と新教科書では異なり、後者の方がまともにも面白味も勝っているせいもあるが、文学的な深みを求める学生は、坊ちゃんの単純すぎるともいえるキャラクターにあまり共感しないからかもしれない。小説の面白味よりも、江戸っ子気質や当時の教師の生活などの方に、学生の興味、関心が向くようであった。

長編を切り取った場合、その部分だけにとどめるか、またはある程度背景を説明するかに迷うが、後の『細雪』においてと同様、味読させようとすると、どうしても全体をほのめかしてしまうことになる。マンガのビデオがあるので、最初の部分(教科書相当)を見せて雰囲気をつかませた。

ここでの問題は、使用語彙の古さである。今日ではほとんど又は全く見られなくなった事物(牛^{ゴウ}砲、へっつい、ランプの油煙、火鉢など)や時代による用語の違い(下女、後架、瓦解=維新、講釈=授業など)また漱石独特の用法(単簡)、言葉としてはあるが古めかしい言い方(奉公)など種々出て来て、言語上の学習を期待する者には不満をもたらし心配がある。実際、それらを作文などに使われては困るので、きちんと指摘しておかねばならないだろう。その煩を少なくするためにも一括して対照表を作り、最初に手渡しておくのも一方法であったと、今になって考えている。

2. 摘み草(1988年)

上野界限の町並と人々の暮らしの移り変わりを、そこで生きた筆者の家族三代の姿とだぶらせながら描いた味合い深い随筆で、内容もそれほど難しくないと思われるのだが、老境の感慨ということからか、やや暗いという印象を⑧年度の学生は持ったようだ。日本社会の変遷が窺えるという点では役に立つと感じるが、祖母と幼かった自分の姿を、老いた自分が今孫娘を連れて歩く姿に二重映しにするといった時間と空間の重ね合わせの多い構図について行けない学生があった。単なる自然描写や感想だけでなく思索的な部分のある文章なので、それに慣れない学生は難しく感じるのだろう。⑦年度のクラスであれば、もっと違った反応が出たのではないか

と思った。

3. 富岳百景 (1987 年)

⑦年度はちょうど準備期間に当たり、教科書も原文をコピーした仮りのもので、注も言語事項もなかった。これだけでは太宰独特の照れや道化ぶり、大仰な身振りとその奥にちらつかせる真摯さなど、その人格を反映した文体を読み取らせるのは無理ではないかと考え、「富士山には、月見草がよく似合う」の箇所を含んだ部分、その他を少しばかり加えてテキストをふくらませた。太宰の文章は、じっくり読んで範とすべきというより、どんどん読んでいくうちにそのリズムや呼吸に慣れ、はじめて独特の文体であることに気づき味読できるのではないかと、思ったからである。「たぶん、あそこあたりが、いただきであろうと、雲の一点にしるしをつけて、そのうちに、雲が切れて、見ると、ちがった」(p. 98)といった読点の多い文、助詞の省略、「意外の」「秀抜の」などの語法、富士の裾野が「のろくさ」と広がるとか、頂きが「ちこんと」出るなど独得な擬態語は、作者特有の感受性から来るものなので、少し長く読みつづけなければ十分な鑑賞ができないような気がする。このことは、正しい日本語を知った上での破格、平凡を脱した個性的な表現、視点の面白さなどを味合うことであらうから、早い段階での学習は、学生に困惑をもたらすかもしれない。

話題としては、富士に対する日本人の感情は特別であるだけでなく、留学生もそれぞれ関心を持っているので、富士への感想や体験を宿題にしたが結構面白い作文を書いてきた。

4. 伊豆の踊子 (1987, 1988 年)

⑦年度に取り扱った際は、前述したように大変意欲的なクラスであったため、この課を読み進むに当たってなるべく全文を読んでみるようにと文庫本を勧めておいた。教室に持ち込ませて、読んだ学生にテキストでは飛ばしてある部分を話させたり、またはこちらから話すといったことを随時試みた。全員が読んだとは思われないが、大体はこのやり方について来たようである。

恋の芽生えや懊悩、別れの悲哀は古今東西変わりが無いので、感情移入や内容理解は容易で、どちらのクラスでも概して好評だった。ただ⑦年度の方が文学的な嗜好が強かったので、比喩の巧みさや情緒的な美しさにまで目を届かせることができたようだ。筋はむしろ単純なので、当時のエリート的な存在の学生と階級的落差のある踊子、その生活や風俗の方がいっそう学生達の興味をそそったという面もあった。ビデオもあり、観光地伊豆が舞台であるため紹介の資料には事欠かなかった。

5. 梗概を書く (1986, 1988 年)

この筆者のように言葉を概念的にでなく、自分の身に引きつけて語ろうとする人の文章はどうしても難しくなる。最初の試用版を使った際は、I-5という早い時期に出て来たので余計にその感を強くした。新教科書では、やや後方に移っているので少しは緩和されたようである。

最初の⑥年度は、いつもの方法で授業を進めたのでうまくいかなかった。それは、太宰の文などとは反対に、一字一句が注意深く選択され、筆者自身の論理即ち思考の流れに沿って組み立てられているため、それを綿密に辿りながら読み進めて行かねばならないからである。

⑧年度は前々年度の反省の上に立って、別の方法を取った。即ち難解といわれる哲学の原書などに取り組むに似た方法、古文を現代文に直すといった方法である。一字一句を吟味しながら普通使われている平凡な言葉や別の言葉で平易な文章に置きかえてみる、例えば文頭の「...、質のいい要約を読んだ時の心の弾みは、ほとんど例外なく原作に遡ろうとする」という文章を「いい要約を読むと、面白くわくわくして、それだけでおしまいにすることができず、ぜひ原作を読みたいという気持ちをどんな人にも起こさせる」とでもいった風に「弾む」や「遡る」の語の意味を押さえながら噛み砕いていくのである。こういう調子で読むと学生をかなり引き込むことができた。最後の方になった時、ある学生がこう叫んだのであった。「梗概を書くのは、原作を書くより大変だ!」と。原作を書くくらいの気構えを梗概を書くことに求めている筆者の意図は、十分に伝わったと内

心はくそ笑みもしたが、これは梗概を書く指導とはまた別である。

6. 虫のいろいろ (1987 年)

この短編は早稲田だけでなく他の大学の日本語の授業(法文科)でも使ってみたが、思索的、哲学的なことを好む学生には好評のようである。身近な昆虫の話や観察からこれほど深遠な考察、即ち人間の性格や運命、宇宙まで、ミクロからマクロへと思いを広げ深めることができるという驚きと感嘆である。しかしこういう私小説にありがちな瑣末主義を指摘する者の中にはいて、『城の崎にて』にも言えることであるが、自然界の小さなものに視線を向ける細やかな神経、観察眼と描写、それらは日本文学の特徴の一つであると説明しておく外なかった。

新教科書では、最後の部分の「不機嫌」の内容に〈注〉が付き、懇切な解説がなされている。文学作品の場合、あまり読み手の自由を縛る解説は避けた方がいいが、このような注は深い鑑賞の助けになるだろう。実際試用版を使った私は、そこまで深く読み取れなかった。これからも少しずつ、難しいと思われる箇所にはこのような注を加えて、鑑賞の手引きとなるものを整えていったらと思う。

7. 細雪 (1988 年)

日本の伝統的な美意識(関西を中心としたものであるが)が色濃く漂っているので、その紹介としては適当と思われ、学生も楽しんだようである。ビデオもあるので、豪華な衣装をまとった美女四姉妹の、平安神宮での花見の場面など見せると、この小説の雰囲気や味合わせることができる。学生の反応も、日本人の美意識や文化を知るに役立つと全員が答えているが、それぞれの関心や興味に誘われて、全体を読み通したいと心を動かされた者がいる一方、「金持のつまらない悩みには関心がありません」と答えた者もあり、好みによって大きな差が出るようである。

日本の風俗、文化といってもこれは、チェホフの『桜の園』のようなもので、当時の庶民生活とは隔りがあり、また戦争に突入していく世の中の、まさに伐られゆく桜に似た美の世界であり、その意味で或る種の抵

抗、反戦の気持がこめられていることも説明しないわけにはいかなかった(発禁についても触れる)。

関西弁が出てくることから、何人かがそれへの関心を示した。

8. 吾輩は猫である

動物の目から見た風刺文学はいろいろな国にあるので、ここでのユーモアは理解しやすく、学生はおおかた面白い。だがここにも『坊ちゃん』ほどではないが同じような用語上の問題があり、また学生の興味も、猫の飼主である教師など人間側の生活、その背景となる社会や時代の方により向きがちである。即ち学生たちは、文学そのものよりも、語学上は勿論であるが、それを通しての日本事情を特に⑧年度は知りたがった。

宿題に、「吾輩(私 / ぼくなど1人称)は、○○である」という題の作文を出したが、それぞれユニークな面白いものを書いてきた。(私は新聞である / 五百円玉である / 火星人である。など)

9. 城の崎にて (1988 年)

日本の小説は暗いものが多いという声クラスに出ていたので、小動物の死ばかりを描いたこの短編を取り上げるのにためらいがあったが、読み終ってからの感想として『細雪』の方がむしろ暗い、という意見が出たのは意外だった。『細雪』は表面は美しく明るい底に流れている思想が暗いというのである。(アメリカの女子学生)それに反してこれは、死が描かれてはいてもそれを通して生への意志が感じられるというのである。これは若さの持つ健康な感受性だろう。とは言え、死の連続描写は、やはりあまり愉快な気持にはなれない。描写の細やかさ的確さは理解できるようで、特別難しい語彙もない。それゆえこの課は、各自音読させるより先にテープを聴かせてみたが、大体のところは聴き取れたようである。ただ、自己の意識の流れに沿った言い回しをするとところがあって、分かりにくいことがある。「で、またそれ(=死)が今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと、『あるがまま』で、気分が希うところが、そう実際にすぐ影響はしないものに相違ない。しかも両

方が本当で、影響した場合は、それでよく、しない場合でもそれでいいのだと思った」など、日本人でも一度読んだだけでは、すんなり理解はできないかもしれない。

10. 休憩時間 (1987, 1988 年)

近代文学や演劇の創草期にその一翼を担った早稻田の、由緒ある文学部の一教室に集う青春群像の一コマを描くこの短編は、文学史や文学用語、人物などの予備知識がなければ、作者の意図や愛惜の情、ユーモア、ペーソスが味合えないのではないかと恐れたが、語句や言い回しは決して易しくはなく、井伏調ともいうべき調子もあって読み進むのは簡単ではなかったにも拘らず、兩年度とも大変好評であった。内容がどの国にも通じる青春像、学生生活であるせいだろうか。固有名詞や特殊な用語、背景の解説がある程度整っておれば、今日でも校庭に記念碑のように建っている演劇博物館、銅像の回りでアジ演説をしている現在の学生達、様変りはしても今でも続いている『早稻田文学』などと結びつけると、学生達にとっては身近で、自分達の学ぶ大学であることから感慨をもって読むことができるようだ。しかし、文学に興味のない学生にとっては、続出する文学者、(日本だけでなく外国の詩人まで) また短歌から翻訳詩までの話は少々うるさく感じるかもしれない。教師側も理解させるのに骨の折れるフレーズもあって、例えば引用文の「あるがままの現実に即して、全的存在の意義を髣髴^{ほらふ}す、觀照の世界なり。味に徹したる人生なり。この心境を芸術といふ」などである。⑦年度は幸いに芸術論の好きな学生がいたので彼を援軍とし、⑧年度はそういうわけにはいかなかったが、ちょうどその頃、8課『言葉の力』を学習し終えていて、学生達は「ああ、それは『見えるものは見えないものにさわっている』と同じようなことですね」と声を上げたので助かった。これなど、『虫のいろいろ』の「不機嫌」の場合のように、注がある方がいいだろう。

この課はかなり長丁場であるが、文学好きの学生はそれほど飽きなかったようである。一番面白がったのは、学生監とやり合う、この小説でもク

ライマックスの部分であった。

IV. 結びとして

以上、上級教科書の特に文学作品を取り扱って来て感じたことは、すぐれた小説、随筆であれば、教授上または学生側の難易度の差はあっても熟読玩味するに堪え、学生も関心と興味を寄せてくるということである。多分それは、著名な作家、筆者であるからには日本語としても文学としてもすぐれ、そこには自ら日本事情が描かれていると考え、学ぶべきものとするからであろうが、それだけではなく、たとえ時代的な古さがあり難解さがあっても、読ませるだけの力をやはり作品自体が持っているということである。私たちが外国語を学ぶときの場合を逆に考えても、作品に描かれた世界が今日的でなくとも、時代的な隔りを頭の中に置きさえすれば十分読め感動する。むしろ、流動してやまない雑駁な現在の姿よりも、その奥に背骨のように貫き通っている不易の姿の方にこそ、その国の文化の本質を見、それに魅せられる場合が多々あるだろう。その意味からも、時代を経ても生き残れるような秀れた作品を供することは必要ではないかと思う。確かに新上級教科書の文学作品には時代的に古いものが多いが、古さは古さとして一種の、いわゆる現代の古典のようなものだと考えればいいのかもしれない。ここでの作品は私自身馴染みのものが多いので楽しみながらやれた。しかし今日性とのギャップをどうするかも考えるべきであろうし、若い方々の意見も聞きたいと思う。

次に文学作品の難易度についてであるが、難解だというのは、坪井佐奈枝氏が指摘するように文化的、歴史的背景が読み手の頭の中にないと作者の意図がつかめられないような文章、一文が長いもの、文構造が複雑なもの、論理的でない文章、また古文がまじるものなどいろいろ要素があるが、文学作品の場合は、作者の独特な文体による難しさ(文法上の破格、

1) 早稲田大学、語学研究所、紀要 34「上級クラスの指導——読解を中心に」p. 122.

作者特有なリズムによる文脈や論理など)も挙げられるだろう。取り扱った文学作品を試みにこの見地から次のように分類してみた。

- 1) 文化的背景、歴史的背景の説明がなくてもほぼ理解できるもの。

(虫のいろいろ、城の崎にて)

- 2) 文化的背景、歴史的背景の説明がなければ、十分に理解できないもの。

(坊ちゃん、伊豆の踊子、細雪、吾輩は猫である、休憩時間)

- 1) と 2) の間に、位置するもの(摘み草)

- 3) 文体や文脈が作家独自のものであるため難解となるもの。または十分な味読ができにくいもの。

(富岳百景、梗概を書く)

1) は特別問題はないが、2) の場合、難しさはあっても、上級の学生はその背景に興味を覚えることが多く、日本文化・事情を学ばせる好機ともなり得るわけであるから、その知識を与えることによって内容もふくらませられるという結果になる。また 3) においても、その作家の文体への親しみ、日本文学への深い理解、ひいては日本語の特質に迫る手掛かりともなり得る場合もあって、三者とも教材として欠かせない要素を持っていると思われる。今後は、これらの分野のそれぞれに、時代の新しいものも付け加えつつ、それに対応する指導方法について十分研究し整えていく必要があろう。

付 記

アンケート結果報告

(1987年度) 後期、文学作品のみ。5人解答(記名)

○質問事項 1. よかった点。

2. あまりよくないと思われる点。

休 憩 時 間 1. ○内容がよかった。積極的なことだったら、堂々とやれと言っている点が印象的。

○大げさな青春の姿。それを皮肉っぽく描いた点は面白かつ

た。

・文学作品として面白い。早稲田の昔を知ってよかった。古い漢字や文章も経験としていい。

・描写は非常に面白い。皆と一緒に青春について話せたこともよかった。

・学生時代のことを思い出し、同感でき、心も若くなった。

2. ・毎日の生活に使えるような言葉や表現が出てくる。(2人)

・当用漢字以外の字も、覚えなければならないので、たいへん。

虫のいろいろ 1. ・日常、あまり注意しなかった虫について観察しているのに感心。

・内容は特によかった。人間のいろいろな性格を知った。

・テーマがよく、一番感心した。

・面白くて楽しい。私小説だから、その人の考えが深くわかるような気がした。

・とても面白い。虫のことなど考えなかったが、この話を読んでから、考えはじめた。著者の考え方は、自然でユニーク。

2. ・弱い生き物を閉じこめることは、悲しい。

(1988年度) 前・後期、文学作品のみ。6人解答(記名)

・質問事項 1. 自分の興味・関心から。① 面白かった。② ロ普通。③ あまり面白くなかった。

2. 一般的見地から。① 役に立つ。② 少しは役に立つ。③ あまり役に立たない。

3. 日本事情や文化を知るのに。① 役に立った。② 少し役に立った。③ あまり役に立たなかった。

4. 言語上の学習に。① 役に立った。② 少し役に立った。③ あまり役に立たなかった。

		(人) 1	(人) 2	(人) 3	(人) 4
坊ちゃん (I-4)	イ	5 ・人物が面白い ・ユーモア ・江戸っ子	5 ・権力と戦うの が面白い ・江戸っ子 や時代が わかる	5 ・当時の社会・文化 がわかる	4 ・言葉、人物がわかりやすい
	ロ	1	1	1	1
	ハ				1

		(人) 1	(人) 2	(人) 3	(人) 4
摘み草 (I-7)	イ	3 ・凹地の小説がすき	2 ・現代社会のある面を知る	5 ・日本の変化過程を知った	5 ・描写、随筆の書き方を学ぶ
	ロ	1	2		
	ハ	2	1	1	1
伊豆の踊子 (I-14)	イ	4 ・純情な恋 ・初恋	5 ・その時代の初恋の心理	5 ・学生、踊子の生活 ・時代の背景、庶民の生活がわかる	4
	ロ	2	2	1	2
	ハ				
梗概を書く (I-15)	イ	2	3 ・梗概の書き方がわかる	1	3 ・書くための勉強になる
	ロ	2	2		1
	ハ	1 ・梗概そのものがつまらない		2	
細雪 (I-24)	イ	2	3 ・当時の家庭の姿を知る	5 ・日本人の風俗。考え方、日本の伝統 京都の文化を知る	4 ・方言が出て来て知識が広がる
	ロ	2	2		1
	ハ	1 ・金持に関心なし			
吾輩は猫である (II-1)	イ	5 ・猫による風刺がもしろい	5 ・当時の教師の生活がわかる	5 ・教師・軍人、弁護士のうちがい	4
	ロ	1 ・全文よみたい	1 ・		2 ・ちょっとわかりに

		(人) 1	(人) 2	(人) 3	(人) 4
	ハ			1	くい
城の崎にて (II-5)	イ	2	3 人生をどう送るか 問題提起	2 ・生き返った人の死 に対する態度を知る	4 ・描写の勉強
	ロ	3 ・それぞれの死の姿 は暗い	1	3	
	ハ			1	1 ・ちょっと わかりにくい
休憩時間 (II-11)	イ	5 ・けんかの 場面が最高に面白い	5 ・日本の大学の様子がわかる	6 ・昔の大学 風景がわかる	5 ・言葉は少し古い がわかりやすい ・文学的な描写は 日本語のレベルを 高める
	ロ ハ	1			